

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

薩田 洋輔

主論文の題目
および
掲載・審査委員

題目 Prediction of Esophagogastric Varices Associated with Oxaliplatin Administration（オキサリプラチン投与に伴う食道胃静脈瘤の予測）

掲載誌 Journal of Gastroenterology and Hepatology open 2021;5:1289-1297

主査 大坪 毅人

副査 小泉 哲

副査 伊澤 直樹

[論文の要旨・価値]大腸癌に対する化学療法においてオキサリプラチンは重要な薬剤であるが非硬変性門脈圧亢進症を引き起こすことが知られている。申請者らは、大腸癌に対するオキサリプラチン治療後の食道胃静脈瘤の特徴を明らかにすることを目的として本研究を行った。対象：2010年10月から2016年1月の間に、進行・再発大腸癌対し一次治療としてオキサリプラチンを含む化学療法を行った106名を対象とした。方法：化学療法の前後で2週間毎にAST, ALT, ビリルビン, アルブミン, 血小板数, 3ヶ月毎の造影CT検査を行った。CTにて門脈圧亢進症が疑われる場合は上部消化管内視鏡検査を実施した。結果：106名中6名に食道胃静脈瘤を認めた。食道胃静脈瘤を認めた群と認めなかった群で年齢、性別、併用薬、オキサリプラチンの投与量に有意差を認められなかった。食道胃静脈瘤を認めなかった群ではオキサリプラチン投与後に血小板数の改善を認めたが、食道胃静脈瘤を認めた群では血小板数が進行性に減少を示した。食道胃静脈瘤を認めなかった群では脾腫はオキサリプラチン投与後に改善したのに対し、食道胃静脈瘤を認めた群ではオキサリプラチン投与後も脾腫の増大を認めた。以上より大腸癌に対しオキサリプラチンを含む化学療法を行った場合は血小板数と脾臓のサイズを評価することで食道胃静脈瘤の発生を予測することが可能で食道静脈瘤の治療を合わせて行うことで化学療法が可能となることが示唆された。本論文は大腸癌化学療法のKey Drugの一つであるオキサリプラチン投与後の副作用である食道胃静脈瘤の制御に関する価値ある論文である。

[審査概要]3名の陪席者のもと、まず申請者より20分ほどのプレゼンテーションが行われた。プレゼンテーションは理解しやすく準備されており発表態度も好感の持てるものであった。主査、副査より本研究に関しての対象の選び方、研究の方法、結果の解析、今後の展望等多岐にわたり質問がおこなわれたが、申請者はいずれの質問にも真摯な態度で概ね良好に回答していた。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]学位審査を通して申請者が本研究に誠実に取り組み、十分な研究能力及び専門的学識を有することがうかがえた。英文読解能力は英文文献の一部を指定し、その場で和訳により十分な読解力があると判断した。以上より申請者薩田洋輔君は学位授与に値すると判断した。